

## 【調査報告】

保育内容指導法（生活と健康）における運動遊びの  
指導について

木 村 達 志

A Teaching Method of Athletic Play for Infants on Content Instruction Method  
in Child Care (Life and Health)

Tatsushi KIMURA

## I. 緒言

本学部の国際教養こども学科は2018年度より開設された新しい学科であり、日本の幼稚園教諭1種免許状・保育士資格およびオーストラリアの保育士資格（Certificate III）の3つのライセンス取得を目指している。そのため、1年次前期に2週間のニュージーランドにおける海外フィールドスタディーおよび2年次の2月から10か月間の海外保育ライセンスプログラムと称するオーストラリアへの留学があり、他の学科と比較すると教育課程もユニークなものになっている。さらに、2019年度からは教職課程コアカリキュラム<sup>(1)</sup>がスタートし、2021年度まではいわゆる旧カリキュラムと新カリキュラムが並立している状態である。今回の研究で扱った保育内容指導法生活と健康は、旧カリキュラムでは1年次後期、新カリキュラムでは2年次後期に配当されている。同科目は30時間2単位で開講し、保育士資格では保育の内容・方法、幼稚園教諭1種免許状では保育内容の指導法に関する科目であり、免許および資格必修の単位となっている。

上述のように、国際教養こども学科では日本国内の実習に加え海外での実習があり、1年次前期のニュージーランドにおける海外フィールドスタディーやオーストラリアにおける海外ライセンスプログラムにおいて部分指導などをする機会もあることから、当該の科目をどの時期に開講し、授業内容をどのように構成するか、また保育の実践力を身につけるためにはどのような工夫をするかについて検討を重ねていく必要がある。

そこで、本研究では、学習者にとって当該授業をどのタイミングで開講するのがよいのか、また授業内容をどのように構成すべきか、授業内容で学習者が困難さを感じていることは何かなどを明らかにし、より効果的な授業を実施するための資料を得ようとした。

## II. 研究の対象と方法

### 1. 対象

上記の研究目的を達成するため、2018年度後期における保育内容指導法生活と健康の受講者50名（旧カリキュラムの学生）を対象とした。

### 2. 方法

図1に示す内容で、自記式のアンケートを2018年度後期の授業の最終回で実施した。アンケートの実施にあたり、対象者へは調査の意義や回答することに対する不利益はない事、集計した結果のみを用い個人名が公表されることはない事、研究結果の公表方法などを口頭およびアンケート用紙中の文書で説明し、研究参加への同意を得た。アンケート回収率は90.0%（45/50例）であり、回収できた回答は全てが有効回答であった。

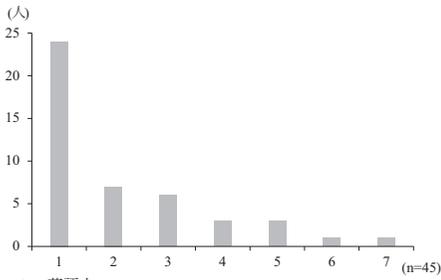
Q.1	NZ研修の後半で行った部分指導を経験して、自分には何が必要だと感じましたか。
Q.2	中学校や高等学校の職業体験などで幼稚園や保育園に行ったことはありますか。
Q.3	これまでボランティアで幼稚園や保育園に行ったことはありますか。
Q.4	これまで人の前に立って何かを指導した経験はありますか。
Q.5	現時点で免許や資格の取得について、どのように考えていますか。
Q.6	あなたは、からだを動かすことが好きですか。
Q.7	あなたは、小さいころに外遊びをしましたか。
Q.8	授業の後半で行った模擬保育では、どのような事が身についたと思いますか。
Q.9	指導者役としての模擬保育では、どのような事が難しかったですか。
Q.10	指導案の作成過程では、メンバーと協力することが出来ましたか。
Q.11	指導案の作成過程では、グループ内でどのような役回りでしたか。
Q.12	この授業はどのタイミング（学期や学年など）に設定されていると効果的でしょうか。
Q.13	この授業では、自分の学習態度は良好であったと思いますか。
Q.14	保育専門職に就くためには、専門的な知識が必要であると思いますか。
Q.15	この授業について、よりやる気になって取り組むためには何が必要であると思いますか。
Q.16	この授業をよりよくするために、どのような点を改善したら良いでしょうか。

図1 質問項目

## III. 結果

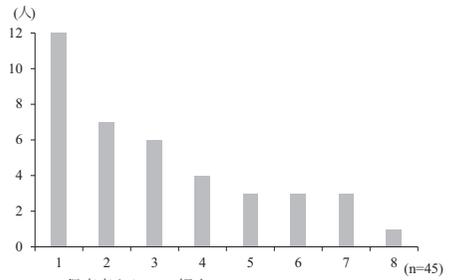
### 1. 基本統計量

当該授業がより有益なものとなるよう、授業改善のポイントを探るうえで鍵になるとされる質問項目の結果について図2から図6へ示した。



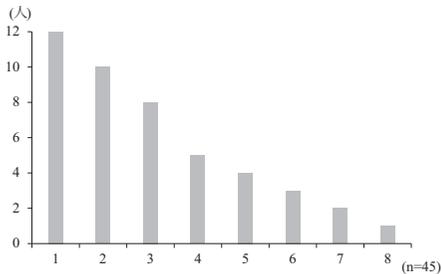
1. 英語力
2. 指導できるネタ（歌を歌う、運動あそび、制作活動、クイズなどすべて含む）
3. 導入、展開、まとめ、など指導の基礎知識
4. 子どもを惹きつける技術
5. 人前に立って話す経験
6. NZの保育事情
7. 子どもの理解（子どもは何に興味があるかなど）

図2 NZでの部分指導を通して必要と感じた資質



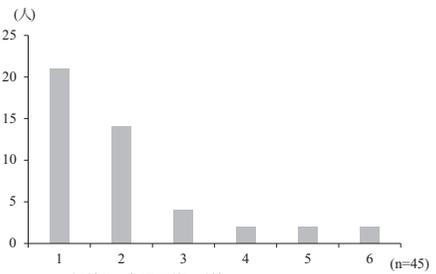
1. 保育者としての視点
2. 導入、展開、まとめ、など指導の基礎知識
3. 指導案の書き方
4. 人前に立って話をする事
5. からだを動かす楽しさ
6. 運動遊びの特性を理解すること
7. 集団を動かす方法やコツ集団を動かす方法やコツ
8. 指導を受けている子どもの気持ち

図3 模擬保育を通して身についたと思われる資質



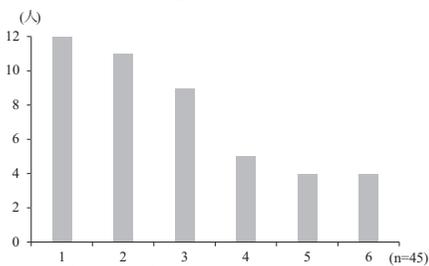
1. 指導案の書き方
2. 指導案から実際の動きをイメージすること
3. 指導のねらいと運動遊びの特性との関係性
4. 運動遊びの特性を理解すること
5. 集団の動かし方
6. 人前に立って話をする事
7. 保育者の援助の欄に記載する内容
8. 話している子どもの注意を引くこと

図4 模擬保育の中で指導上難しいと感じた内容



1. 1年前期（NZ研修の前）
2. この時期で良い
3. 指導案作成に関する授業を受けたあと
4. 2年後期（教育実習Ⅰが終わり、オーストラリア研修の前）
5. 2年前期（NZ研修や教育実習Ⅰが終わった後）
6. 子どもの身体的および心理発達を学習したあと

図5 当該科目の望ましい開講時期



1. 自分が何を身につけなければならないかという明確な自己課題
2. 子どもの前に立つ経験
3. 幼稚園や保育園の現場を知る
4. この授業が将来どのように役立つかという展望
5. 授業の楽しさ
6. 保育者になるという目標をしっかりと持つ

図6 当該授業へ積極的にするために必要なもの

Q.1のニュージーランド研修の後半で行った部分指導を経験し自分に必要な資質としては、45例中24例(53.3%)が英語力を挙げており他の項目を大きく引き離す結果となった。第2位は、指導できるネタ(歌を歌う、運動あそび、制作活動、クイズなどすべて含む)が7例(15.6%)であり、第3位は導入、展開、まとめ、など指導の基礎知識を選択したものが6例(13.3%)であった(図2)。Q.8の模擬保育で身につけた資質は、第1位が保育者としての視点で12例(30.8%)、第2位が導入、展開、まとめ、など指導の基礎知識で7例(17.9%)、第3位が指導案の書き方で6例(15.4%)となった(図3)。Q.9の模擬保育(指導者役)で難しかった内容は、第1位が指導案の書き方で12例(26.7%)、第2位が指導案から実際の動きをイメージすることで10例(22.2%)、第3位が指導のねらいと運動遊びの特性との関係性で8例(17.8%)となった(図4)。Q.12の当該授業の望ましいと思う開講時期は、第1位が1年次前期(ニュージーランド研修の前)で21例(46.7%)、第2位が現行の1年次後期で14例(31.1%)であり、この2つが他の時期を大きく引き離し選択された(図5)。Q.15のこの授業に対する動機付けであるが、第1位は自分が何を身につけなければならないかという明確な自己課題で12例(26.7%)、第2位が子どもの前に立つ経験で11例(24.4%)、第3位が幼稚園や保育園の現場を知るの9例(20.0%)であった(図6)。

この他に対象者プロフィールの項目(Q.2、Q.3、Q.4、Q.6、Q.7、Q.13)では、Q.2の中学校や高等学校での幼稚園や保育園における職業体験は、あるが36例(80.0%)ないが9例(20.0%)であった。Q.3の幼稚園や保育園でのボランティア経験は、ないが20例(44.4%)、1、2回程度あるが15例(33.3%)、よくあるが10例(22.2%)であった。Q.4の人前での指導経験は、1、2回程度あるが20例(44.4%)、ないが16例(35.6%)、よくあるが9例(20.0%)であった。Q.6の自分がかつらだを動かすことについては、まあまあ好きが22例(48.9%)、とても好きが16例(35.6%)あまり好きではないが7例(15.6%)であった。Q.7の幼児期の外遊び経験は、とてもよくしたが25例(55.6%)、まあまあしたが15例(33.3%)、あまりしなかったが5例(11.1%)であった。Q.13の当該授業の受講態度は、良かったが26例(57.8%)、ふつうであるが10例(22.2%)、とても良かったが9例(20.0%)であった。

## 2. クロス集計

本研究では、対象者プロフィールの項目における変数と他の質問項目の変数と間でクロス集計および有意差検定(カイ二乗検定)を試みた。しかし、母集団が50例であり、なおかつ分布に偏りがあり検定に必要なサンプルサイズ(5例以上)を得ることができなかったセルがあり、有意差検定(カイ二乗検定)の実施が不可能であった。

## IV. 考察

保育教諭養成課程研究会が記した教職課程コアカリキュラムにおける領域に関する専門的事項のモデルカリキュラムの考え方<sup>(2)</sup>では、当該科目の授業の概要及び全体目標は、「特に乳幼

児期の健康に関わる生活習慣や心身の発育・発達、運動発達の特徴の理解を深め、適切な指導方法を身に付ける。」と記されている。また、一般目標および到達目標には、「3）指導案の構造を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。4）模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。」とあり、当科においても運動遊びの模擬保育を複数回取り入れている。

当該授業においても、モデルカリキュラムの考え方から大きく逸脱することのないようにシラバスを作成し、指導案の作成や模擬保育を取り入れている。本研究の対象者はニュージーランド研修の後半で行った部分指導を経験し、自分に必要な資質として53.3%が英語を上げていた。2位以下の回答は指導に関する基礎知識であり、1年次前期の授業を終えたばかりの段階では当然と言える。現地で学生が実施した部分指導の内容は様々であったが、どのような資質が指導者として必要か実感できたのではないかと考える。

次に、模擬保育を通して身についた資質であるが、1位に保育者の視点が上がっていることから、モデルカリキュラムの到達目標が達成されつつあると思われる。第2位の導入、展開、まとめなど指導の基礎知識や第3位の指導案の書き方は、実習指導や他の科目でも学習するものであり、学習を重ねることによって定着していくものと予想している。坂口<sup>(3)</sup>は、「学生は模擬保育において保育の内容により注意を向ける傾向がある」と述べていることから、模擬保育の実施にあたっては授業の目的やそこで身につけるべき資質や視点を示すことが重要であると再認識された。

模擬保育（指導者役）で難しかった内容は第1位が指導案の書き方であったが、まだ実習指導などで学習していないため当然の結果と受け止めた。第2位以下は、集団を動かすという指導力や運動の内容の理解が必要であるという内容は当該科目の独自性である。村岡<sup>(4)</sup>は、領域健康にかかわる保育者の専門性について「遊びの指導では、保育者自身のレスポンス性を高めること、子ども理解や見通しをもった指導、遊びの課題に応じた適切な保育環境を設定し、遊びの充実感を感じることができるよう指導力が求められる。」と述べており、この先行研究にも示されているように、運動遊びについての内容を丁寧に教授することが重要な事ではないかと考えられた。

当該授業の望ましいと思う開講時期は、第1位が1年次前期であったが、これはニュージーランド研修の後半で行った部分指導を経験したことによるものであると思われるが、当該科目に限らず人の前に立って何かを指導する経験がある程度積んでおけば、ニュージーランド研修がより有益になるのではないかと考えられた。また、当該授業に対する動機付けの回答（当該授業へ積極的になるために必要なもの）において裏付けられているように、具体的な自己課題や子どもの前に立つ経験が学習の動機づけとなっていた。坂口<sup>(3)</sup>は、自由記述の内容は「運動遊びを用いた模擬保育の経験の有無が大きく影響を与えていると考えられる。」と述べており、模擬保育に限らずボランティア活動などでの指導の経験の多寡が学習の動機づけや学生の資質向上に関係すると考えられた。

今回の研究では、母集団のサイズや回答の分布に偏りがありクロス集計を実施することが出

来ず、対象者の属性と学習に関する動機づけなどの関連を明らかにすることが出来なかった。今後は複数年度でデータを得るなどして母集団を増やし、なおかつ選択肢に工夫を加えることで両者の関連も明らかにして行く必要があると考えている。また、2019年度からは新カリキュラムに移行しているため、当該授業は2年次後期に開講される。新カリキュラムでは、幼稚園における教育実習も同時期に実施されるため、当該授業に対する役割は実践力という意味でもより重要度が増すと考えられる。授業の改善に取り組み、教職課程コアカリキュラムの保育内容の指導法と保育の着想で示されている到達目標をより多くの学生がクリアできるようにしたい。

### 参考文献

- (1) 教職課程コアカリキュラム、教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会、文部科学省ホームページ（2020.1.3取得）[https://www.mext.go.jp/content/1421964\\_2\\_1\\_2.pdf#search=%27%E6%95%99%E8%81%B7%E8%AA%B2%E7%A8%8B%E3%82%B3%E3%82%A2%E3%82%AB%E3%83%AA%E3%82%AD%E3%83%A5%E3%83%A9%E3%83%A0%27](https://www.mext.go.jp/content/1421964_2_1_2.pdf#search=%27%E6%95%99%E8%81%B7%E8%AA%B2%E7%A8%8B%E3%82%B3%E3%82%A2%E3%82%AB%E3%83%AA%E3%82%AD%E3%83%A5%E3%83%A9%E3%83%A0%27)
- (2) 幼稚園教諭養成課程をどう構成するか モデルカリキュラムに基づく提案、保育教諭養成課程研究会編著、萌文書林（東京）、p. 39、2017
- (3) 坂口将太、運動遊びを用いた模擬保育における学生の環境構成に関する一考察、聖和短期大学紀要、1、pp. 27-31、2016
- (4) 村岡真澄、これからの保育者養成に向けて一領域「健康」から捉える専門性、愛知教育大学教育実践総合センター紀要、8、pp. 107-113、2005

（受理日 2020年1月6日）